

鳥 羽 離 宮 跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

鳥羽離宮跡

2003年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたびホテル建設工事に伴います鳥羽離宮跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます次第です。

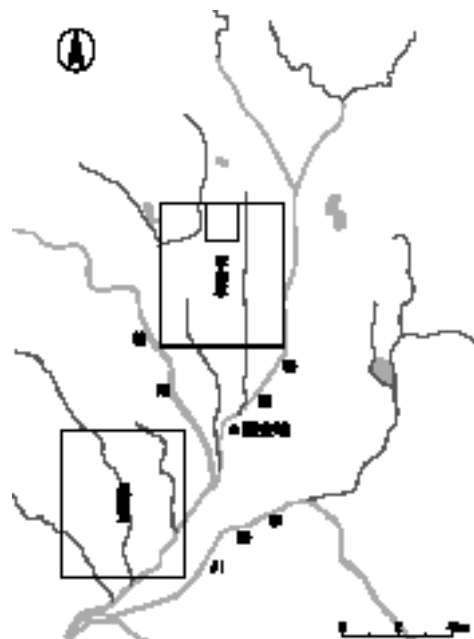
平成15年6月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | | |
|----|----------|--|
| 1 | 遺 跡 名 | 鳥羽離宮跡 |
| 2 | 調査地点所在地 | 京都市伏見区竹田西小屋ノ内町 |
| 3 | 委託者及び承諾者 | 関西音響株式会社 代表取締役 奥田欣史 |
| 4 | 調査期間 | 2003年1月14日～2003年3月11日 |
| 5 | 調査面積 | 約263m ² |
| 6 | 調査担当職員 | |
| | 調 査 | 吉崎 伸 |
| | 測 量 | 宮原健吾 |
| | 写真撮影 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 7 | 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「城南宮」を参考にし、作成した。 |
| 8 | 使用測地系 | 日本測地系（改正前） 平面直角座標系（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 | 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 | 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。 |
| 11 | 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 12 | 遺構番号 | 検出順に通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 13 | 遺物番号 | 土器類・瓦類・その他の順に通し番号を付した。 |
| 14 | 資料整理 | |
| | 資料整理協力 | 上村和直・桜井みどり |
| | 写真撮影 | 村井伸也・幸明綾子 |
| 15 | 本書編集 | 吉崎 伸 |
| | 執筆分担 | 吉崎 伸：1～3、4（1）
（2）（4）、5
上村和直：4（3） |



（調査地点図）

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 位置と環境	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺での調査	3
3 . 遺 構	4
(1) 層 序	4
(2) 遺構の概要	5
4 . 遺 物	7
(1) 遺物の概要	7
(2) 土器類	7
(3) 瓦 類	8
(4) その他の遺物	9
5 . ま と め	10

図 版 目 次

図版 1	遺構	調査区全景 (西から)
図版 2	遺構	1 第 2 面全景 平安時代 (西から) 2 第 1 面全景 鳥羽離宮期・鎌倉時代 (西から)
図版 3	遺物	溝101出土土器・木製品
図版 4	遺物	溝101出土軒瓦

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査区配置図 (1 : 1,000)	2
図 3	調査前全景 (西から)	2
図 4	調査状況	2

図5	金剛心院周辺の調査と遺構復元図（1：2,000）	3
図6	基本層位図 調査区東壁（1：50）	4
図7	遺構平面図（1：250）	6
図8	溝101出土土器実測図（1：4）	8
図9	溝101出土軒瓦拓影・実測図（1：4）	9
図10	溝101出土木製品実測図（1：4）	10
図11	溝101出土銭貨拓影（1：1）	10

表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	7

鳥羽離宮跡147次調査

1. 調査経過

この調査はホテル建設工事に伴う鳥羽離宮跡147次調査である。調査地は、京都市伏見区竹田西小屋ノ内町に所在し、名神高速道路京都南インターチェンジの南側にあるホテル街の一角にあたる。調査前は更地であったが、それ以前は京都観光バス会社の社屋及び駐車場として利用されていた。この周辺は平安時代後期、白河天皇によって造営が開始された鳥羽離宮が存在し、数多くの御所や御堂が営まれていた。特に当該地一帯は久寿元年（1154）に造営された金剛心院に相当することがこれまでの調査で明らかとなっている。当地の東側に隣接するホテルの事前調査で、金剛心院の北側を区画する東西方向の溝が敷地の南端部分で発見されており、当地にもこの溝が続くことが予想された。そのためホテル建設工事に先立って埋蔵文化財の調査を実施することとなった。

試掘調査

調査は遺構の状況を確認する試掘調査から開始された。試掘は京都市埋蔵文化財調査センター

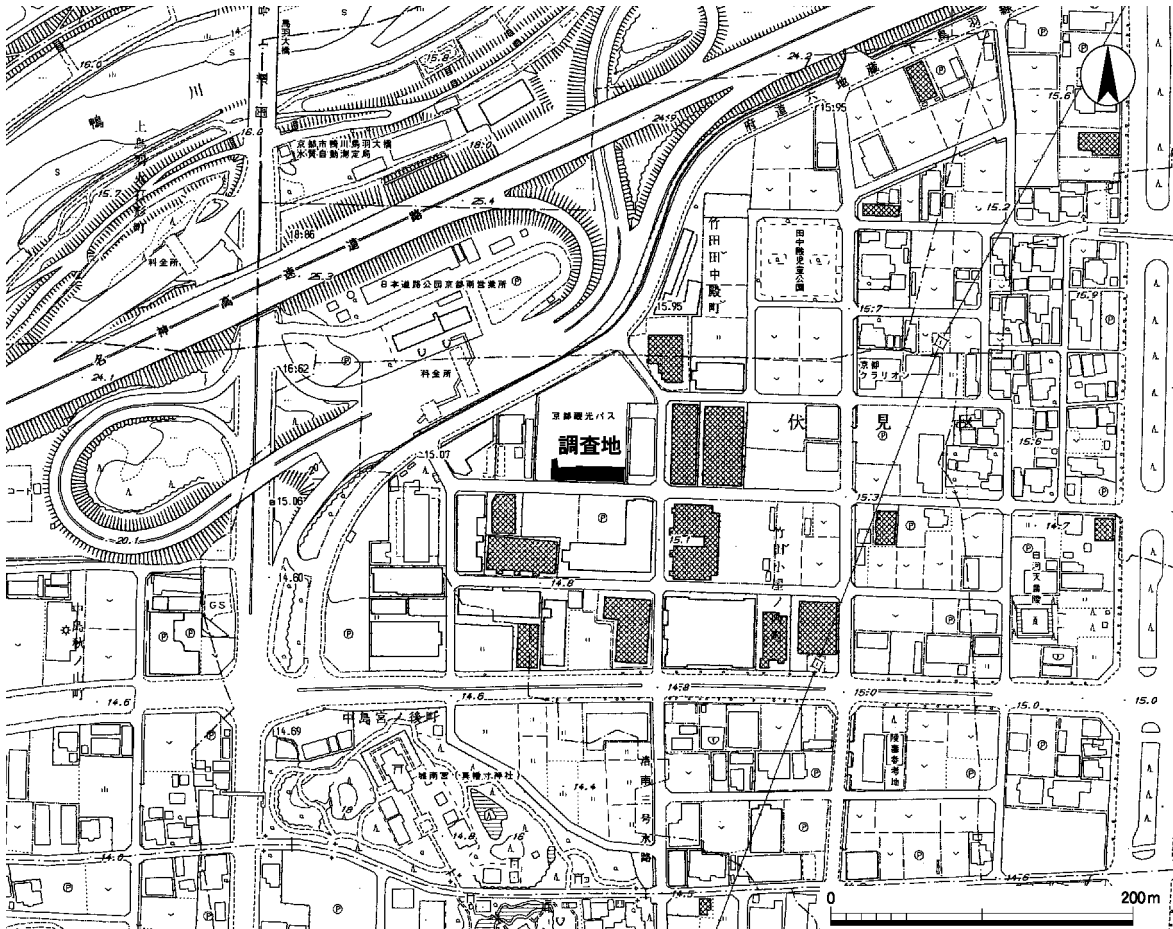


図1 調査位置図(1:5,000)

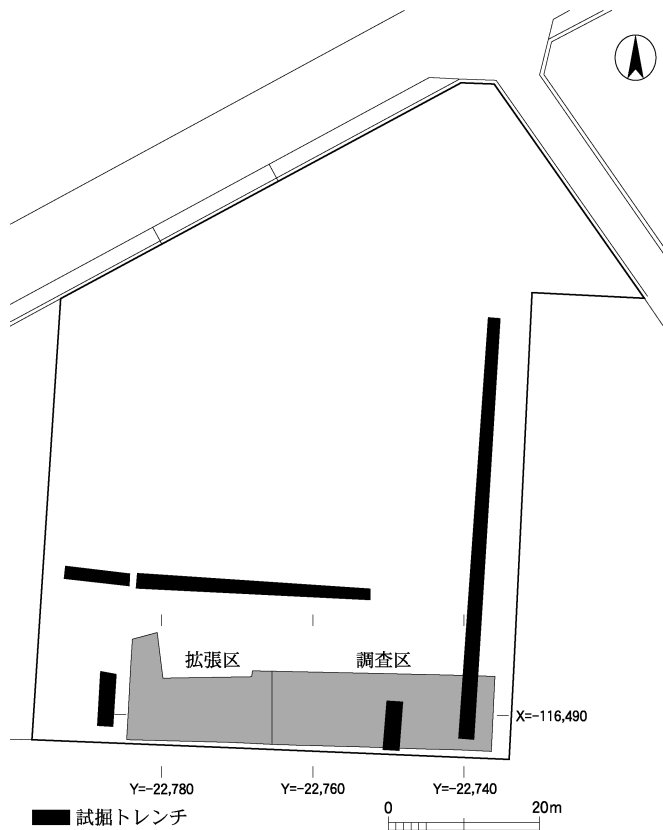


図2 調査区配置図(1:1,000)

が担当し、2002年10月21・22日に実施された。この調査では旧建物の解体による土層の乱れや激しい湧水のために満足な調査ができず、簡単な断面観察にとどまらざるをえなかった。しかしながら、平安時代後期から鎌倉時代(鳥羽離宮¹⁾)の遺構面が残存していることを確認することができたので、引き続き発掘調査が必要との結論を得た。

発掘調査

発掘調査は(財)京都市埋蔵文化財研究所が担当し、大松建設工業の協力によって実施した。調査は上述した金剛心院北限の東西溝の確認を主要な目的とした。しかし、この溝は敷地の南端部分に位置すると考えられ、掘削によって近接する道路に影響を及ぼす可能性があっ

た。このため、敷地の南端に沿って鋼矢板を打ち込んで土留めを施し、その後調査を行った。その結果、当初の予想通りに金剛心院北限の溝を検出し、さらにその下層では平安時代の小溝群を確認することができた。また、調査区を西側に拡張することによって、金剛心院北限の溝の延長部を確認することができた。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

京都盆地の南部には、かつて巨椋池と呼ばれる巨大な湖沼が存在した。その北縁には賀茂川や



図3 調査前全景(西から)



図4 調査状況

桂川が流れ込み、湿潤地帯を形成していた。平安時代中・後期には湖沼の北部が干上がり、ここに平安京の朱雀大路から真っ直ぐ南へ延びる「鳥羽作道」が作られ、その南端には津が設けられた。周辺には貴族の別業も営まれた。応徳三年（1086）に白河上皇はその別業の一つに後院を造営して南殿とし、さらに北殿、泉殿、馬場殿などを次々に造営して院政の拠点として整備を進めていく。続く、鳥羽法皇も泉殿を継承して東殿を、東殿と北殿の間に田中殿を営んだ。これらの院御所には証金剛院（南殿）、勝光明院（北殿）、成菩提院・安楽寿院（東殿）といった御堂が附属する。これらを総称して「鳥羽殿」あるいは「鳥羽離宮」と呼び、現在の名神高速道路京都南インターチェンジの南側、東は近畿日本鉄道京都線、西は賀茂川に画された一帯がほぼこれに相当する。今も東殿跡に白河天皇陵、鳥羽天皇陵、近衛天皇陵があり、馬場殿にあった城南宮も存続しており、わずかではあるが往時の姿をとどめている。今回の調査区は上述したように、田中殿の南東の一角に造営された金剛心院の北端に相当する。

（２）周辺での調査

鳥羽離宮関連の調査は当調査をもって147次に及ぶ。特に1980年代の前半、京都南インターチェンジ南側付近を中心にホテル建設のラッシュが訪れ、それに伴って埋蔵文化財の調査が急速に

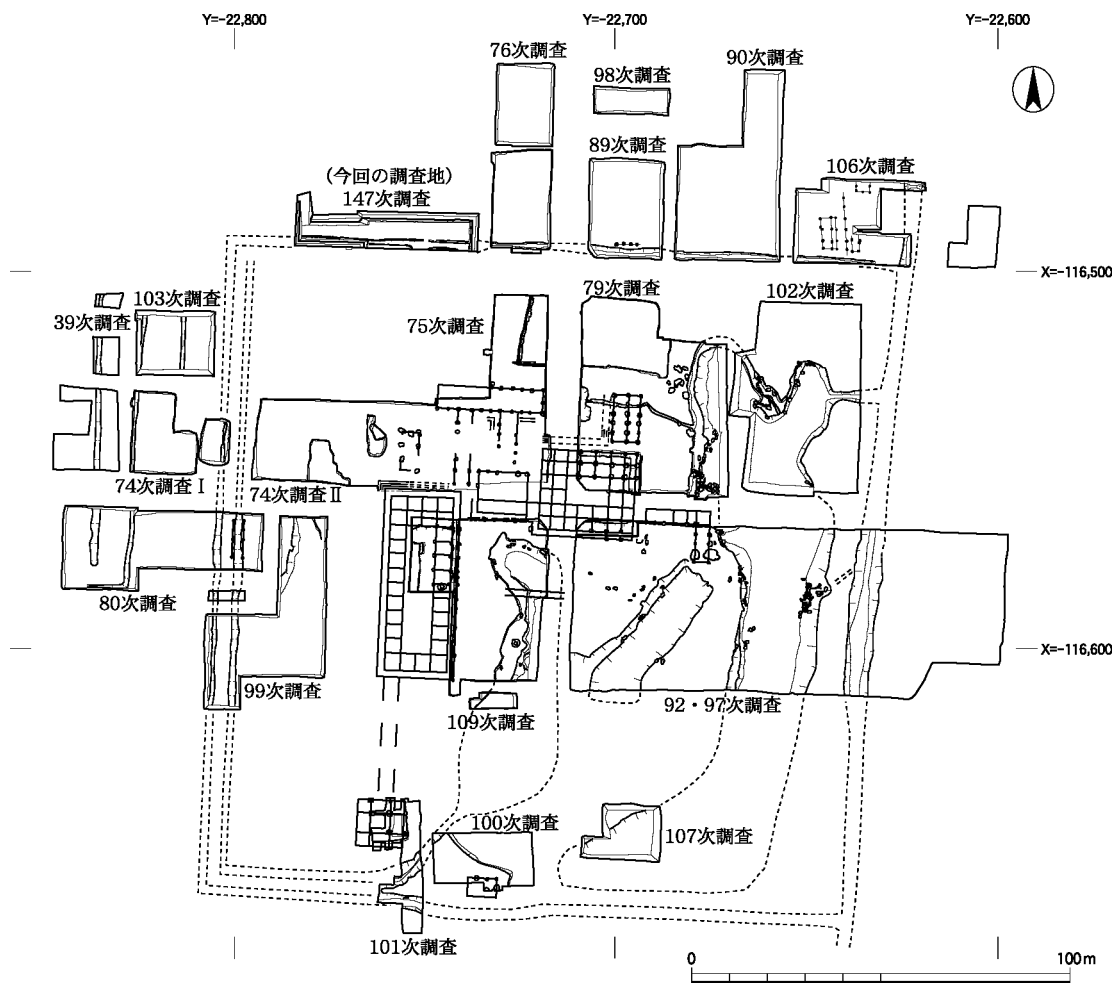


図5 金剛心院周辺の調査と遺構復元図（1：2,000）

進み、金剛心院周辺だけでも10数次の調査が実施された。その結果、金剛心院の範囲、内部の構成がほぼ明らかになっている。それによると金剛心院は東西約165m、南北約170mの方形の敷地をもち、溝と築地塀（西側のみ確認）によって区画されていた。敷地の中央北側には釈迦堂と考えられる桁行7間、梁行6間の建物が、その南西には九体阿弥陀堂と考えられる桁行9間、梁行2間で四面に庇と縁の付く建物が存在する。敷地の北西には寢殿や雑舎などがあり、それぞれの建物は渡殿（廊下）で結ばれていた。さらに、敷地の東から南側にかけては景石や滝組を配した広大な園池が広がっていた。

3. 遺 構

(1) 層 序

当地には観光バス会社社屋を建設した際の整地層が地表下約1.2mまで存在する。その下には旧耕作土とみられるオリーブ黒色砂泥層（7.5Y3/1）0.2m、床土の灰色泥砂層（10Y4/1）0.1m程度がある。さらにその下は暗緑灰色砂泥層（10G4/1）0.2m、灰色砂泥層（7.5Y4/1）0.2m、灰オリーブ砂泥層（5Y4/2）0.3～0.4m、灰色砂泥層（5Y4/1）0.05m、灰色砂泥層（7.5Y4/1）0.2mと続く。これらの層は中世から近世にかけての遺物をわずかに包含しており、この最も下の灰色砂泥層からは鎌倉時代の遺物が出土している。その下には灰黄褐色砂泥層（10YR4/2）が0.3mあり、この上面が鳥羽離宮期と鎌倉時代の遺構面（第1面）で、標高13.3m前後である。さらに下層には灰色砂泥層（7.5Y4/1）0.15m、暗灰黄色砂泥層（2.5Y4/2）0.05mがあり、地山

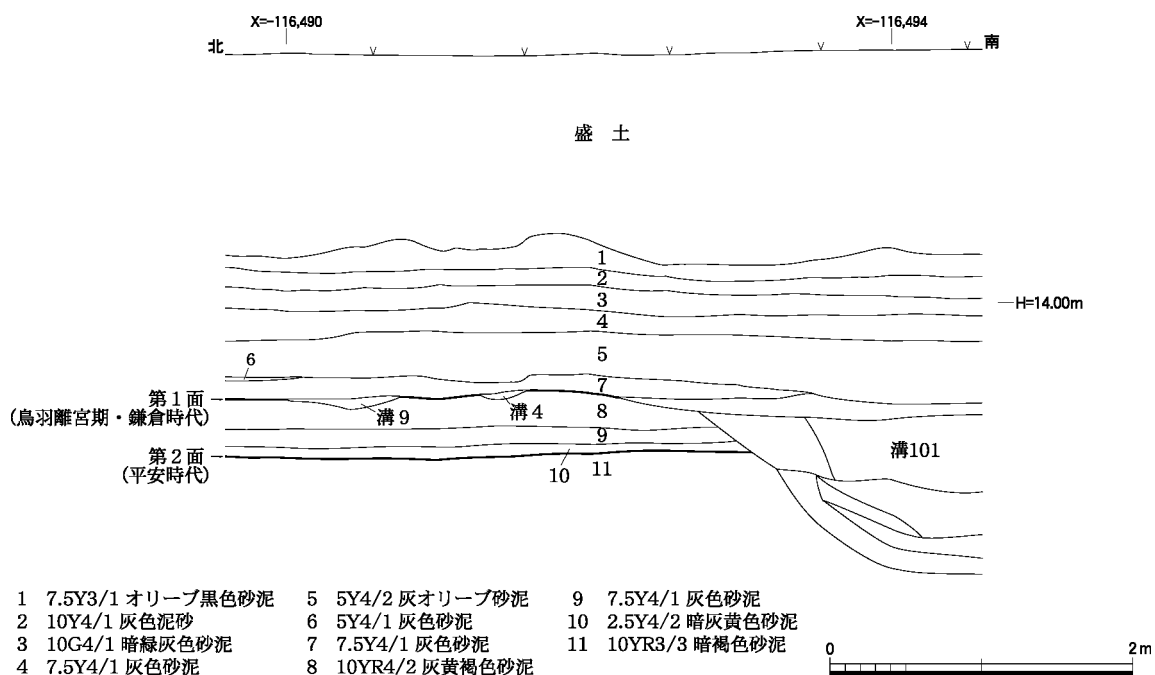


図6 基本層位図 調査区東壁（1：50）

と考えている暗褐色砂泥層（10YR3/3）と続く。この暗褐色砂泥層の上面（第2面）で平安時代と考えられる小溝群と湿地を検出した。標高は13.0m前後である。

（2）遺構の概要

検出した遺構は平安時代から鎌倉時代のものがある。これらは平安時代、鳥羽離宮期、鎌倉時代の3時期に分けることができる。その他に江戸時代のものもあるが、これは上層から掘り込まれた溝の残存部分である。

平安時代の遺構（図版2-1・図7）

第2面で検出した遺構群で南北方向の小溝群、湿地状遺構、土壌などがある。いずれも出土遺物が乏しいため時期の確定は困難であるが、遺構の成立面、土層の堆積状況から平安時代後期以前のものであると判断した。

小溝群（溝201～205）は南北方向の溝で4.0～5.0m間隔で並行している。いずれも幅0.3～0.4m、深さ0.3m前後と幅に対して深い溝である。その形状から耕作に伴う排水用の溝であると考えられる。

湿地状遺構（湿地206）調査区の西部で東肩の一部を検出した。底部は北西方向に向かって傾斜しており、最も深い所は検出面から1.0mを測る。底部には腐植土混じりの粘土層が厚く堆積しており、水生植物の繁茂する沼状を呈していたことがわかる。

土壌（土壌207・208）直径1.0m、深さ0.5m前後の円形の土壌である。土層の堆積状況から立木の根による攪乱の可能性が高い。

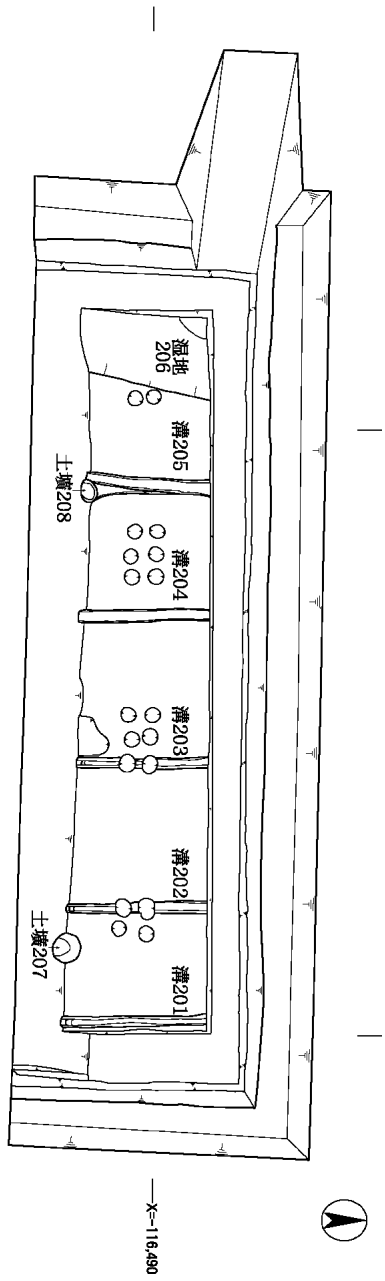
鳥羽離宮期の遺構（図版2-2・図7）

溝（溝101）西でやや北に振れる東西方向の溝であり、延長22m分を検出した。今回は溝の北肩部の検出にとどまり、南肩は調査区外になる。溝の規模は幅2.2m以上、深さ0.8mを測るが、断面の形状から推測すると幅4.0m、深さ1.1m程度になるものと考えられる。堆積層は大きく3層に分かれ、最下層（第3層）には腐植土が堆積しており、ここからは平安時代後期（12世紀中頃）の土器・瓦類が出土している。また、最上層（第1層）からは鎌倉時代の遺物が出土している。

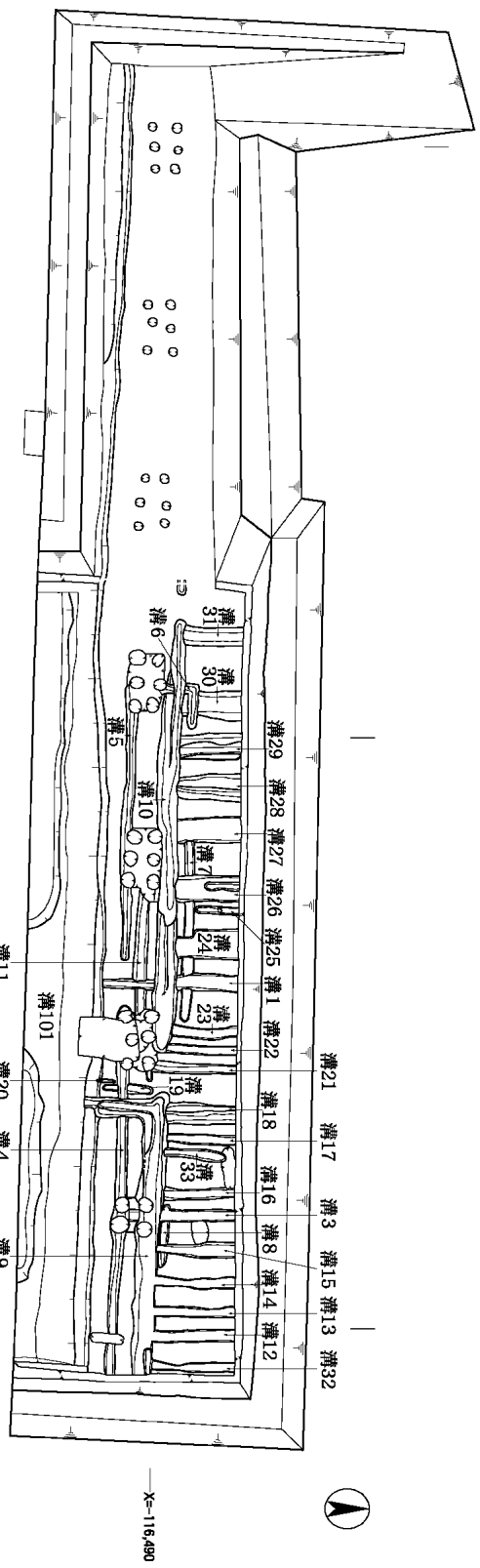
この溝は前述したように金剛心院の北限を画する溝で、これまでの調査を総合すると延長160mに渡って確認したことになる。

表1 遺構概要表

時 期	遺 構
平安時代	土壌207・208、溝201～205、湿地206
鳥羽離宮期	溝101
鎌倉時代	溝2～24・26～33
江戸時代	溝1・25



第2面 (平安時代)



第1面 (鳥羽離宮期・鎌倉時代)



図7 遺構平面図 (1 : 250)

鎌倉時代の遺構（図版2-2・図7）

鳥羽離宮関連の遺構と同一面で検出した小溝群がある。重複関係から古と新の2群に分かれる。

小溝群（古）東西方向の溝（溝9・10）と北側からそれに流れ込む南北方向の溝（溝12～18・21～24・26～33）からなる。溝の規模は小さいもので幅0.2～0.3m、深さ0.05～0.1m、大きいもので幅0.5～1.0m、深さ0.1～0.2m程度で幅に対して浅いものが多い。

小溝群（新）2列に並ぶ東西方向の溝（溝4・5・7）と南北方向の溝（溝3）カギ形に曲がる溝（溝6）がある。幅0.3m、深さ0.05～0.1m程度である。これらはいずれも耕作の畝溝であると考えられる。

4. 遺物

（1）遺物の概要

遺物は整理箱にして14箱出土した。種類は土器類・瓦類などがあり、大半が瓦類である。その他に木製品と銭貨が若干出土している。時期別には、古墳時代から江戸時代のものがあるが、鳥羽離宮期のものが大半を占め、他の時期に属する遺物は微量である。

以下、土器類は主要な一括遺物を報告し、瓦類は主要軒瓦を報告する。

（2）土器類（図版3・図8）

土器類は金剛心院北限の溝（溝101）の下層から比較的まとまって出土した。大半が土師器の皿で他に瓦器と白磁の椀がわずかにある。今回、図化できたものは土師器皿のみである。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器	0箱		0箱	0箱
平安時代	土師器	1箱		0箱	1箱
	その他				
鳥羽離宮期	土師器・瓦器・白磁	10箱	土師器11点	7箱	1箱
	軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦		軒丸瓦6点、軒平瓦4点		
	その他		木製品2点、銭貨1点		
鎌倉時代	土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器	2箱		0箱	2箱
	丸瓦・平瓦				
	その他				
江戸時代	土師器・染付・施釉陶器	1箱		0箱	1箱
	丸瓦・平瓦				
	その他				
計		14箱	24点（2箱）	7箱	5箱

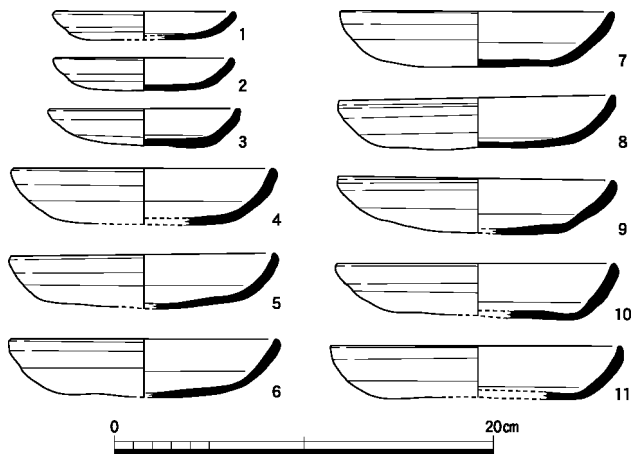


図8 溝101出土土器実測図(1:4)

土師器 口径10cm前後の小型のもの(1~3)と口径14.0~15.0cm程度の大型のもの(4~11)がある。いずれも平らな底部と湾曲しながら立ち上がる口縁部からなる。口縁外面には2段の強い横方向のナデが施され、底部は外面はオサエ、内面はナデである。期中~新段階²⁾(12世紀中頃)の時期に比定できる。

(3) 瓦類(図版4・図9)

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などがある。軒瓦は23点出土し、軒丸瓦17点・軒平瓦6点である。軒丸瓦は蓮華文1型式14点・巴文1型式1点・型式不明1点で、蓮華文は范型の違いで数種に分かれる。産地は、山城産1点、讃岐産1点、他は播磨産である。軒平瓦は唐草文2型式5点・型式不明1点で、唐草文は范型の違いで数種に分かれる。産地は、いずれも播磨産である。

軒瓦の出土地点は、溝101から18点、包含層など遺構に伴わないものが5点あるが、今回報告する軒瓦はすべて溝101から出土したものである。以下、種類毎に主要な瓦を報告する³⁾。

軒丸瓦

軒丸瓦1(12~16) 複弁6弁蓮華文である。中房は平坦で、圏線が巡り、半球状の蓮子1個を配する。蓮弁は互いに接し、子葉あり。周縁は素文である。種類には、蓮弁の長さが長く子葉が細いもの(12)、蓮弁の長さが短く子葉が太く丸いもの(13)、蓮弁の長さがやや短く子葉が細いもの(14)、蓮弁の長さが長く子葉がやや細いもの(15)、蓮弁の長さが長く子葉が太く丸いもの(16)がある。范はB型。瓦当部裏面上部に溝を付け、丸瓦を当て、粘土を付加して接合する。瓦当部側面横ナデ・裏面不定方向のナデである。丸瓦凸面縦ナデ・凹面布目・側面縦ナデである。胎土は細砂粒を含み、灰色、硬質である。同文瓦が、鳥羽殿金剛心院⁴⁾・法住寺殿蓮華王院⁵⁾などの遺跡から、また、播磨神出窯宮ノ裏支群⁶⁾・釜ノ口支群⁷⁾、魚橋窯などの生産址から出土している。

軒丸瓦2(17) 左巻き巴文である。接合不明、調整不明である。胎土は細砂粒を含み、灰白色、軟質である。讃岐産である。

軒平瓦

軒平瓦1(18~20) 3回反転外向唐草文である。中心飾りは上向C字形である。唐草文の主葉は大きく反転し、子葉は強く巻き込む。周縁は素文である。種類には、左3転目が横長く子葉の巻が弱いもの(18)、唐草が太いもの(19)、左3転目の子葉の巻が強いもの(20)がある。范はB型。段顎。瓦当部裏面上部に溝を付け、平瓦を当て、上下脇から粘土を付加して接合する包

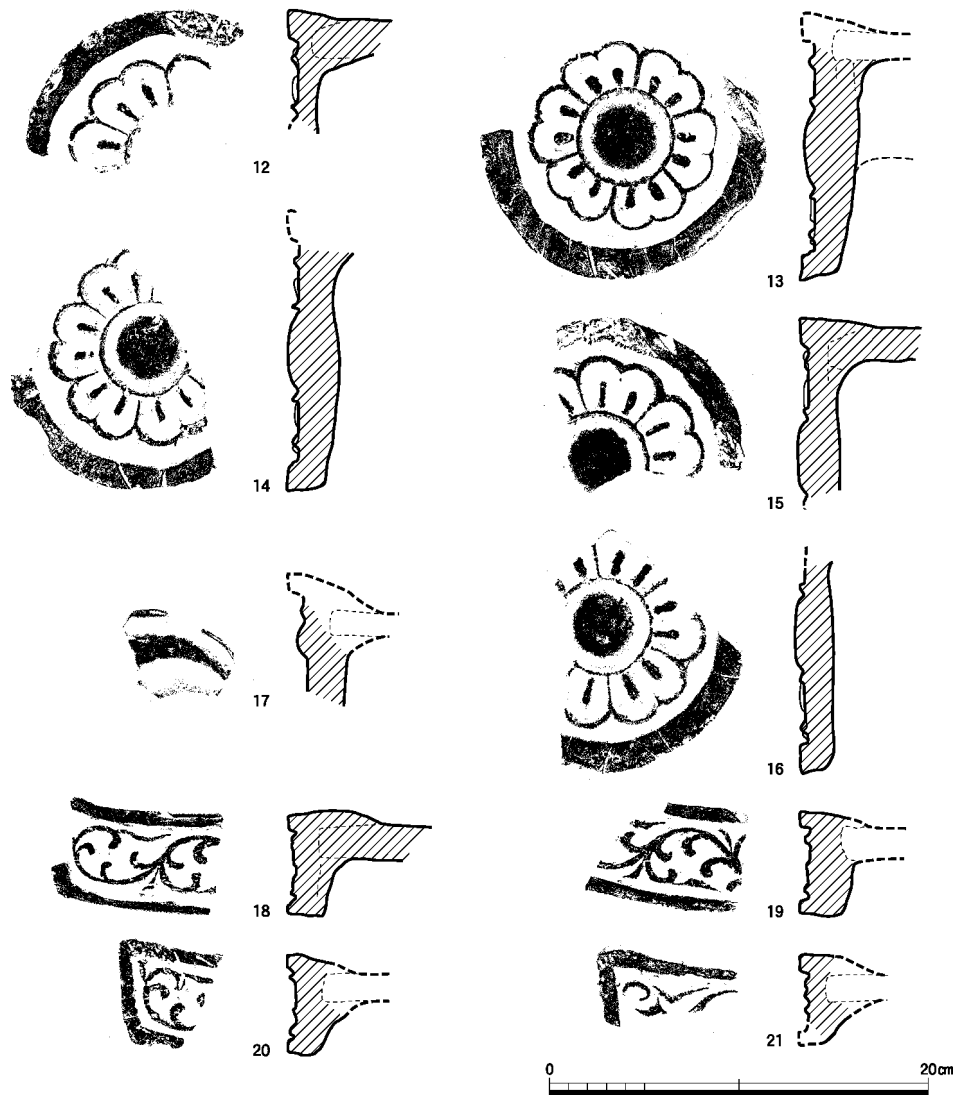


図9 溝101出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

み込み技法である。瓦当部凹面・凸面・裏面横ナデである。平瓦凹面布目・凸面平行叩きである。胎土は細砂粒を含み、灰色、硬質である。同文瓦が、鳥羽殿金剛心院などの遺跡から、また、播磨神出窯⁸⁾、魚橋窯、林崎三本松窯⁹⁾などの生産址から出土している。

軒平瓦2（21）外向唐草文である。中心飾りは上向C字形で、中心に三葉形を配す。唐草文は両側に2転する。唐草文の主葉は大きく反転し、子葉は強く巻き込む。文様左端部は詰めている。周縁は素文である。范はB型。段顎。瓦当部裏面上部に溝を付け、平瓦を当て、上下脇から粘土を付加して接合する包み込み技法である。瓦当部凹面・裏面横ナデである。胎土は細砂粒を含み、灰色、硬質である。同文瓦が、鳥羽殿金剛心院¹⁰⁾などの遺跡から、また、播磨神出窯老ノ口支群¹¹⁾などの生産址から出土している。

（4）その他の遺物

木製品（図版3・図10）下駄が溝101から2点出土している。下駄（22）はかかと部分を欠損するが、平面形は小判形を呈するものと考えられる。鼻緒の前孔は小さくほぼ中央に穿けられ、

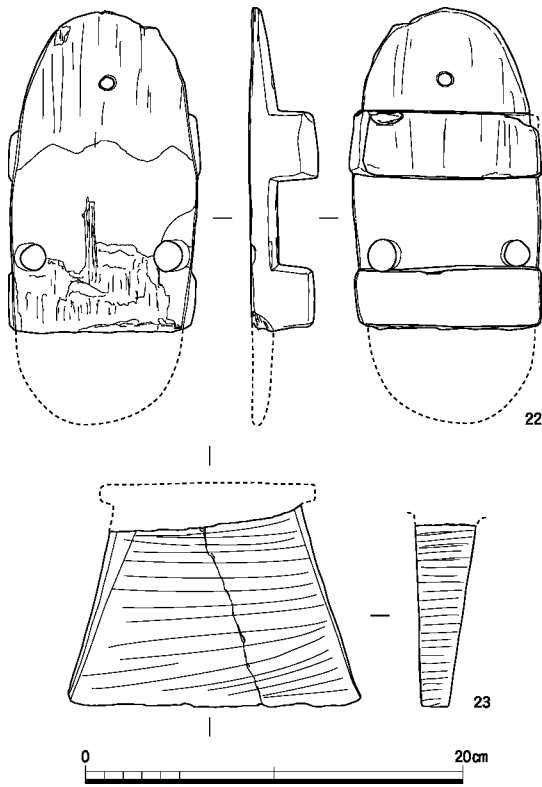


図10 溝101出土木製品実測図(1:4)

鋸の切断痕を留めている。従って銚切りの切断痕を留めた側が下駄の内側になるものと考えられる。歯の底面はほとんど磨滅していない。最大幅15.4cm、残存高10.5cmである。

錢貨(図11) 富壽神寶(弘仁九年〔818〕初鑄)(24)が溝101から1点出土している。表裏共に錆化が進んでいるが保存状況は比較的良好である。直径2.3cmを測る。

5.まとめ

今回の調査では鳥羽離宮田中殿に附属する金剛心院の北限の溝を検出できたことが最大の成果である。

この溝に関しては鳥羽離宮76次・89次・90次・106次調査でそれぞれ検出しており、今回の調査でほぼその全容を確認し終えた。それらを総合すると溝は東から西に流れ、西に向かうほど規模が拡大している。今回の調査区では幅4.0m(推定)、深さ1.1mと堀ともいえる規模になっていることが明らかとなった。残念ながら西端は隣の敷地となるため明らかにできないが、恐らく金剛心院の西側を区画する溝につながるものと考えられる。

ところで、金剛心院の西側に関しては築地が存在することが確認されている。同様に北側にも築地が存在するか否かは大きな問題であるが、この部分は現行の道路下になるため確認できない。一つの判断材料は築地に伴う溝からの瓦の出土量である。西側築地に伴う溝からは築地に葺かれていたと考えられる瓦が大量に出土しているのに比べ、今回検出した溝101からは瓦の出土量がさほど多くない。このことから北側築地の存在は否定的にならざるを得ない。ただ今後、道路工事

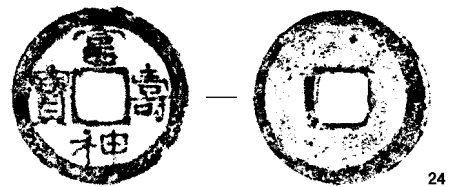


図11 溝101出土錢貨拓影(1:1)

後孔は大きく、側面近くの左右対称位置に穿けられる。歯は上板よりもやや張り出し、底の部分はわずかに磨滅している。また、欠損部分の断面は焦げて炭化しており、周辺にはすすが付着している。残存長17.0cm、幅10.1cm、高さ3.6cmである。下駄(23)は歯の部分のみが残存している。歯は下方が大きくバチ形に開き高さも非常に高い。前後どちらの歯であるか不明であるが、図の表面は刃物で削って丁寧に仕上げているのに比べて、裏面は

に伴う立会調査などを綿密に行って確認する必要がある。

一方、今回の調査では鳥羽離宮期遺構の下層に平安時代と考えられる小溝群を検出した。この遺構の検出面（第2面）と鳥羽離宮期の面（第1面）の間には灰黄褐色砂泥層（10YR4/2）、灰色砂泥層（7.5Y4/1）、暗灰黄色砂泥層（2.5Y4/2）の3層が堆積している。これらには平安時代後期の遺物が少量含まれており、鳥羽離宮造営に伴う整地層であると考えられる。第2面で検出した小溝群が耕作に伴うものであるとすれば、金剛心院は耕地を埋め立てて造営されたことになる。こうした状況は「水田の中に金剛心院を造営した」という文献の記述と一致してきわめて興味深い。ともあれこの溝の発見は鳥羽離宮造営直前の土地利用状況を考察する上で貴重な成果となった。

註

- 1) 本報告においては鳥羽離宮という遺跡の特殊性を考慮して、通常の時代区分のほかに、離宮の造営が開始される応徳三年（1086）から、御堂の造営が行われなくなる承久の変（1221）頃までの間を「鳥羽離宮期」として取り扱う。
- 2) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 3) 瓦の用語、製作技法などは（財）京都市埋蔵文化財研究所編『木村捷三郎収集瓦図録』1996年に準じる。
- 4) 木下保明・鈴木久男「第74次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年など
- 5) 京都府教育委員会編「法住寺殿発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1966）』1966年
- 6) 神戸市教育委員会編「神出古窯址群」『昭和56年度 神戸市埋蔵文化財年報』1983年
- 7) 今里幾次「播磨魚橋瓦窯跡」『播磨考古学研究』今里幾次論文集刊行会 1980年
- 8) 兵庫県教育委員会編『神出古窯址群 - 神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告 - 』1998年
- 9) 註8に同じ。この文献に林崎三本松窯出土瓦の拓影が紹介されている。
- 10) 鈴木久男・前田義明「鳥羽離宮跡第109次調査」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 11) 神戸市教育委員会編「神出古窯址群」『昭和58年度 神戸市埋蔵文化財年報』1986年
- 12) 前田義明・丸川義広「第80次調査」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年
前田義明・堀内明博「鳥羽離宮跡第99次調査」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1987年
- 13) 『兵範記』（仁平三年四月二十日の条）に金剛心院の位置について「馬場殿北樹北、田中南北六十丈、東西五十丈点定」、同じく（十月十八日の条）に「件所、馬場殿北、田中新御所南、大路南、往古田中也、去春点定其所、四月被始木造」とある。

参考文献

杉山信三『院家建築の研究』吉川弘分館 1986年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	とばりきゅうあと							
書名	鳥羽離宮跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2002-18							
編集者名	吉崎 伸							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2003年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とばりきゅうあと 鳥羽離宮跡 (147次調査)	きょうとしふしみく 京都市伏見区 たけだにしごやの 竹田西小屋ノ うちちょう 内町	26100	1059	34度 56分 59秒	135度 45分 03秒	2003年1月 14日～2003 年3月11日	263m ²	ホテル 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
鳥羽離宮跡 (147次調査)	離宮跡	平安時代	土壌・溝・湿地	土師器		金剛心院北限の溝 を検出した。		
		鳥羽離宮期	溝	土器類（土師器・瓦器 ・白磁）、瓦類（軒丸 瓦・軒平瓦・丸瓦・平 瓦）、木製品・銭貨				
		鎌倉時代	溝	土器類（土師器・須恵 器・瓦器・施釉陶器）、 瓦類（丸瓦・平瓦）				
		江戸時代	溝	土器類（土師器・染付 ・施釉陶器）				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-18

鳥羽離宮跡

発行日 2003年6月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961